

続文化は、
今に生きる

だいぶ前のことになる。奈良

県文化会館で、雅楽師芝祐靖さんが主宰する伶楽舎の演奏会があった。そこで、敦煌で見つけた琵琶譜を復原正倉院楽器で演奏してみた。いつもの悠長な雅楽

琵琶譜のはなし

深澤芳樹

ではなく、とても軽やかだった。西域の草原をゆく馬のテンポにしたと、芝さんの解説があった。

それから当時奈良学芸大学で

教えていた林謙三さんが、登壇

した。中国西域の敦煌で見つ

た四弦琵琶譜二五曲を、現代の

中国で解読することができない。

しかし日本では、この楽譜の表記

法と奏法を雅楽がながく継承し

てきた。だから、その琵琶譜を

演奏することができると。

大宝律令(七〇一年制定)では、

儀礼や外交を担当する治部省に、

雅楽寮(うたいまいのつかさ)を

おいた。生徒だけで、三六六人。

最初に教わる外来の音楽は、唐

楽、高麗楽、百濟楽、新羅楽、そ

れに伎楽(徳丸吉彦)ものがたり

日本音楽史(宮波シユア新書)。

その授業では、楽譜をもちい

て教えていたにちがいない。正倉

院に、天平一九(七四七)年七月

二七日付けの写経料紙納受帳の

雅楽寮及び諸寺より種々の音楽

並に、咸に來り集る。復、王臣

諸氏の五節・久米舞・櫛伏・踏歌・

袍袴等の歌舞有り。東西より声

を発し、庭を分けて奏す。作す

ことの奇しく偉きこと勝けて

記すべからず。仏法東に歸りて

より齊会の儀、未だ嘗て此の如

盛んなるは有らず

『東大寺要録』卷第三供養章第

三開眼供養会に、日本ばかりで

なく、唐古楽、唐散楽、林邑楽、

高麗楽など、中国、カンボジア、

朝鮮半島に起源するさまざまな

楽を奏でた、とある。

近衛家伝世で、現在は陽明文

庫蔵の「五弦譜」は、宝亀四(七七

三年二月一日の日付がある。

林謙三さんは、この楽譜を、「思

うに宝亀四年を遡る近い年代に

唐より舶載した五弦譜があり、

同類の楽譜を後に集めて書写し

たものか、そのまた書写が本譜

であろうか。」と、推定した。平

安時代の旧伏見宮家蔵の琵琶譜

もある。以後、各種の琵琶譜が

現代に伝わる。

さて中国隋代に、萬宝常とい

う大音楽家がいた。私は、郭沫

若さんの文章(牧田英一さん訳)

で知った(隋代の大音楽家『郭

沫若撰集』第一五巻雄渾社)。

「…彼は卓越した演奏家であ

るとともに音楽理論家であった。

しかし不幸なことに、彼の物質

面での生涯はきわめて不遇で、

一生涯奴隸の境遇から抜け出る

ことができず、ついに餓死してし

まった。そればかりか、彼の音楽

理論までが当時の権勢ある文化

強盗に剽窃されてしまい、ほと

んど埋没してしまうという目に

あっている。『隋書』には、「…宝

常は詔を奉じ、遂に諸樂器を造

つた。その音はおおむね鄭譯の調

より一律下っていた。さらに『樂

譜』六十四巻を撰し、八音が旋

てそれぞれ宮音になる法、改弦

(弦の締めぐあいをかえる)、移

柱(柱の位置をずらす)の変法を

具に論じ、八十四調百四十四律

をつくったが、その変化は一千八

声に達した。…妻は宝常が病臥

にあつたため、ついにその家財を

盗んで逃げた。…郭沫若さん

は、その家財のなかに「もしか

したら彼の命とたのむ樂器(それ

はきつと琵琶だ)がはいっていた

かもしれない。」という。

その西域由来の四弦四柱の胡

琵琶が、正倉院に五面伝わる。

(日本考古学)

急胡相問



一フスロ又ハ一フスロ
ハロ一フスロ又ハ一フスロ
重頭一フスロ又ハ一フスロ
一フスロ又ハ一フスロ

敦煌発見の琵琶譜部分 (深澤芳樹写)